

# シノドスへの歩み みことばと共に 主の復活の主日C年

小西広志

2022年4月17日

## はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。主のご復活おめでとうございます。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は2022年4月17日、主の復活の主日です。今日の三つの朗読箇所をシノドス的な観点から読んで味わってみましょう。

## わたしたちは……証人です。

今日の第一朗読はカエサリアに住む百人隊長であったコルネリウスの家でペトロがおこなった説教から採られています(使10章34-43節)。味わいたいのは39節の「わたしたちは、イエスがユダヤ人の住む地方、特にエルサレムでなされたことすべての証人です」にある「わたしたちは、証人です」です。イエスさまがなされたこと、お話になられたこと、そして十字架に架けられたこと、さらには三日目に死者の中から父なる神さまによって立ち上がらせていただいたこと、これら一連の出来事の証人であるとペトロは力強く主張します。

証人であるペトロはただ見聞きしたことを伝えているだけではないようです。といいますのも42節で「イエスは、御自分が生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた者であることを、民に宣べ伝え、力強く証しするようにと、わたしたちお命じになりました」とありますから、証人としての使命は復活し、今もペトロたちの間で生きておられるイエスさまから命じられたものなのです。

## パン種

『コリントの信徒への第一の手紙』からの第二朗読では「パン種」ということばをこころに留めたいものです(5章6b節)。「パン種」とは酵母、イースト菌のことです。イスラエルでは一度パンをつくると、パン種の入った粉、つまり練り粉を次のパン作りのためにとっておいたそうです。しかし、時間が過ぎたり、保存方法が悪いとパン種は古くなってしまい、次にパンを作るときには十分に膨らまなかったり、味が落ちたりしたそうです。

新約聖書では多くの場合、古いパン種と呼んで、取り除くべき過去の生き方、態度を示しています。前のパン種に頼って新しくパンをつくるのではなく、パン種がなくとも十分に膨らむパンであることが求められるのです。つまり、過去に縛られて、過去の価値観に信頼して生きるのではなく、今、何もないところから生き始めることが求められているのです。そのために、イエスさまは十字架に架けられたのです。

## 見て、信じた

復活の主日の日中のミサでは毎年『ヨハネによる福音書』が読まれます。「見る」ということばに注目しましょう。四回登場します。1節でマグダラの MARIA は「墓から石が取りのけてあるのを見」ました。5節でもう一人の弟子が墓をのぞき込んで「亜麻布が平らになっているのが見え」ました。これは、新共同訳では訳されていなくて、フランシスコ会訳に頼りました。さらに、6節でシモン・ペトロは墓に入って、「亜麻布が置いてあるのを見」ました。最後にもう一人の弟子も墓に入って「見て、信じ」ました。8節です。同じ「見る」ですが、ギリシア語の動詞が異なるそうです。

わたしたちの生活でもそうですが、同じ「見る」でも意味合いが異なります。ごくごく普通に目を使って「見る」もあれば、じっくり時間をかけて「見る」もあれば、精神的に洞察するという意味で「見る」を使うこともあります。

8節の「見て、信じた」の箇所は、こころの目で見るの意味でそうです。しかも、8節では何を見たかがハッキリとしません。ですから、ここでの「見る」は物体や状況を「見る」ではなく、精神的に「見る」を意味しているのではないのでしょうか。

## まとめ

復活祭を迎えて、イエスさまの復活を表現するシンボルで教会の中はあふれています。復活のロウソクの小さな火。受洗者が手にするロウソクの炎、祭壇を明るく照らす火の数々。これらは「光よりの光」であるイエスさまをシンボリックに表します。もし、光が消えてしまったら、暗闇へと返ってしまいます。復活のイエスさまは世界に光をもたらしたのです。

司祭が身につける祭服は白です。受洗者が身につける衣服も白です。復活のロウソクは基本白です。その上にデザインを描く場合もありますが、教会によっては祭壇の上にかかげられている十字架に白い布をかける場合もあります。白は復活したイエスさまの栄光の姿を表します。復活のタマゴは、白いタマゴに自分たちの信仰の表現として色をつけていくのです。

いつにもまして、復活祭にはシンボリックな表現が教会の中にあります。クリスマスの頃のように具体的な馬小屋はありません。光と白の色をこころの目で見つめて、イエスさまが本当に復活なされて、わたしたちの間におられることを実感するのです。弟子たちが「見て、信じた」ように。